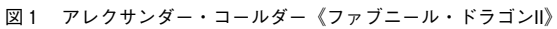


～コールダー、黒川紀章、バリー・アラン・バークス～

くことがあるのですが、それも無理からぬところがあります。美術館の建物は樹木で囲まれており、特に葉が生い茂る夏の間は見つけにくい状態になっています。そこには美術館を設計した黒川紀章氏の意図が反映されています。氏の建築のコンセプトは「共生の思想」という言葉でしばしば語られますが、周囲の樹木との調和は「自然との共生」の反映ということになります。つまり、建築が自然に包み込まれるように、という発想ですから、見つけにくいのは当然、ということになります。

こうして、同じ白川公園の中にある科学館の巨大なプラネタリウムなどを横目に見ながら美術館にたどり着くわけですが、周囲を樹木で囲まれていましたから、美術館の建物は近くまでやってきて、突然現れるというよう



な印象を初めての方は受けるかもしれません。そして美術館の敷地内に入り、入り口を目指して歩く来館者の方々の目に最初に飛び込んでくるのが、コールダーの《ファブニール・ドラゴンII》(図1)です。この作品は美術館が開館した1988年から同じ場所に立っており、以来ほぼ30年、来館者の方々を温かくお迎えしています。制作されたのは1969年ですから、名古屋市美術館にやってくる20年ほど前になります。作者のアレクサンダー・コールダー(1898-1976)はアメリカを代表する彫刻家の一人で、この作品を制作した時すでに71歳。彼にとっては晩年の代表作の一つになります。コールダーの作品は「モビール」に代表されるように、動きと色彩、そして遊び心を彫刻の中に取り入れた点で高く評価されています。それはロダンなどに代表される過去の重厚で情熱的な表現とは対照的なもので、彫刻の概念を全く変えてしまったと言っても差し支えないでしょう。《ファブニール・ドラゴンII》は「スタンディング・モビール」、すなわち大地にしっかりと立つ下部と、軽やかに動く上部とを組み合わせた作品ですが、鋼鉄という素材の重さや硬さよりも、飄々としたユーモアと軽やかさ、そして親しみやすさを感じさせる仕上がりになっています。さらに赤や青、黄色といった色彩が、作品の明るく軽快な印象を一層強めています。「ようこそ、いらっしやいませ。どうぞ構えたりせずに、気軽に楽しんでいってください」。そんな美術館からのメッセージをコールダーの作品は伝えてくれます。

来館者の方々をお迎えするメッセージは、

コールダーの作品だけでなく美術館の建物からも発信されていることにお気づきでしょうか？ 来館者の方々が入り口に向かう時最初に通過するのは、グリッドと呼ばれる柱と梁だけで構成されている空間です。ここには屋根がついていません。建物のようで建物ではない。設計者の黒川氏が「中間領域」と呼ぶ空間です。その背後にも共生の思想があります。つまり「内」と「外」との共生。内部でもあり外部でもある中間領域を設けることにより、公園から美術館の内部へ、一枚のドアを経て突然世界が変わるのではなく、ゆるやかに気持ちを移行させていく、美術への期待を次第に高めていくという仕掛けなのです。

開かれた美術館であるべき、というメッセージは他にもまだあります。この建物は上から見るとホッチキスのような形をしています。南北を貫く垂直軸と、そこから左に30度ほど傾いた北西と南東を貫く軸を組み合わせたホッチキスです。来館者の方々は北側から南に向かって美術館内に入りますので、二つの軸の開開口部に向かう形になります。軸を腕と見なせば、美術館は両腕を広げて来館者の方々をお迎えしていることになります。そして、この両腕を広げた開口部はほとんどがガラス面でできています。この建物の特徴の一つにサンクン・ガーデンがありますが、地上階から地下に向かって斜めに掘り下げ、庭とすることにより、地階部分が通常の閉塞感から解放され明るくなります。そして、地階から2階までをすべてガラス面にすることにより、来館者の方々は美術館に入る前にその内部の構造を知ることができるのです。「ご覧

よって開発されました。1935（昭和10）年には埠頭が完成し、一寒村に過ぎなかった羅津の人口は二万五千人を超え、「内地」の新潟や敦賀に向けて一ヶ月10往復の日満連絡船が就航されるまでになりました。ただ、戦況が悪化して行くなかで、辺境の「新開地」で、父はどのように過ごしていたのか、大変気になりました。

鈴蘭が咲く野辺で撮影された、現在の自分よりもはるかに若い父の姿を見ていると、それまで調査の対象として客観的にしか見ていなかった「満洲」に対して、少し「切なさ」すら感じました。(J.T.)

★1970年代の彫刻と私★

やろまいか '76への参加（前編）

造形作家 庄司 達

この企画は1976年に行われた「やろまい
か'76」と称し、「日常空間への志向」をテ
ーマにしたアートプロジェクトである。愛知、
岐阜、三重の3県をまたぐ広域の美術展覧
会であるが、広い場所を会場にした従来の
野外展示とは異なり、この企画に参加する
作家自らが選んだ、日常的な場所や地域を
会場にして、ひと夏90日間を会期とした作
品展である。

当時では前例のないアートプロジェクトとなったので、企画までの経過を書いておきたい。その前年の秋に一か月間の会期で、名古屋造形短大卒業の古川清さんや美術家の松尾公三さんの呼びかけで、私を含む10数人の若手アーティストが名古屋市の郊外、19号線沿いの「喫茶リスボン」の敷地を借りて、「造形空間・ルート19」という野外展を開催した。開催後参加者の中から、一つの会場で皆が展示するのではなく、複数の日常的な場所を会場とする野外展をやりたい、という考えが出て彼らが発起人となり定期的に集まって話し合っているということで次が始まった。

約3か月間、平均して10人前後の出席者が新しい野外美術展の考え方や方法について、様々な角度から論じ合った。その結果、自主企画、自己負担で進めることを前提に、既存の展示会場を含まない、日常性の強い場所を複数選ぶこととしたが日常空間の多様性を考慮して、参加者自身が日常性に富んだ場所を選んで参加するという方式を採用した。日常空間には「変化」と

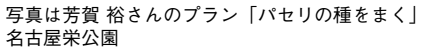
いう時間が流れていて常に一様ではないので、会期としては6月6日から9月9日までの3か月間とした。

この展の企画を立てた発起人が中心になって運営委員会を組織し、若手の美術、デザイン、建築家に参加への依頼書を送り、最終的には30名の参加が可能となった。

参加者が選んだ日常空間は概ね、各自の住居や勤務地の近くが選ばれていて、三重県の鈴鹿市や岐阜県の墨俣町内の他、愛知県の尾張、名古屋、知多、三河の各地に広がっていた。

運営委員会は30名の参加予定者と展覧会開催に向け、全体の会合を開き企画内容を確認し合った。その上で見学案内付きの広報チラシを作成し、3か月間のスケジュールを立て、参加者負担による運営予算を明らかにした。会期が始まれば新聞、テレビ、雑誌の取材に応じ、プランを発表している各地の状況を見学して、作者へのインタビューや撮影をして記録に残す。これには地元の評論家にコメンテーターを依頼して同行してもらうことになった。

展の終盤には公開シンポジウムを開くことが予定され、この大掛かりなプロジェクトの意味や成果は何だったかを議論し合うことにもなった。



時の話題

満洲の写真

今春開催した特別展『異郷のモダニズム-満洲写真全史-』（4/29～6/25）では、地味な企画に関わらず、新聞・雑誌やテレビ等、数多くのメディアに採り上げていただきました。NHK名古屋放送局では夕方のニュース番組のなかで紹介していただき、さらに同番組は、展覧会の後期に入って全国ネットの朝のニュース番組で再放映、紹介されました。

朝6時台という早い時間帯での放映にもかかわらず、多くの方々をご覧になったようで、当日は開館前から数多くの問い合わせの電話が寄せられました。

「亡くなった父が満鉄に勤めて居た。」とか、
「三歳まで鞍山に住んでいた。」といったお
話も聞かせていただきました。

あるいは「父の遺品を整理していたら、満洲に居た頃の写真が出てきた。」とか、「当時満洲で出されていた本や地図がある。」といった情報までいただき、その後に「そろそろ身辺整理（つまり「終活」）を考えていて、引き取ってもらえないだろうか？」というご提案まで。そうしたお話をお聞きしていると、

かつて人々が生活した「満洲」の記録を集めるアーカイヴがあってしかるべきかとも思いました。

寄せられた数多くの「情報」の中には、思いがけない手紙もありました。父方の伯父の娘、年の離れた従姉とはこれまで全く面識はなかったのですが、早朝の放送を見て、すぐに親戚と認識してくれ、手紙とともに三枚の写真を送ってくれました。1943（昭和18）年に羅津で撮影されたという写真には、伯父家族と叔母、それに父が写っていました。この時期、羅津の満鉄の杜宅に住んでいた伯父を頼って、父と叔母は海を渡ったようです。

北朝鮮の日本海に面した羅津は、満鉄に

の通り、全ては開放されています。どうぞ安心してお越しく下さい」。そんなメッセージがこの構造からも伝わってきます。

《ファブニール・ドラゴンⅡ》は、その名の通り「ファブニール」という名前を持つ「龍」を表した作品で、北欧に起源を持つ物語です。その物語をヒントにワーグナーが作曲した楽劇が『ニーベルングの指環』で、ここではファーフナーと名前を変え、世界を支配する力を持つといわれるラインの黄金を守る龍として登場します。なぜコールドーが北欧に起源を持つ龍を自作の題名として採用したのかは分かっていませんが、一説には様々な財宝や装身具を守る龍を自らになぞらえたのではないかと言われています。つまりファブニールはコールドーの自画像（自刻像？）というわけです。アトリエで制作中のコールドーを撮影した晩年の写真が残されているのですが、雑多な金属や工具類で埋め尽くされたそこは、芸術家のアトリエというよりもむしろ小さな工場と呼ぶ方がふさわしく、ペンチやプライヤー片手にありふれた金属を加工して素晴らしい作品を生み出すコールドーは、まさに錬金術師と呼ぶにふさわしい存在です。金属や工具に囲まれた自身の姿を黄金を守る龍になぞらえるというのは、ジャイアント・チャイルドと呼ばれたこの作家ならありそうなことかもしれません。もし、そうだとすれば、この龍は美術品という人類のかけがえのない財産を守ってくれる存在であるとともに、コールドーのように新たな価値を生み出す存在でもあり、まさに美術館の守護神としてその正面に立ち続けていてくれることになります。

《ファブニール・ドラゴンⅡ》は、1969年の作品ということもあり、当館の収集方針の中では「現代美術」として位置づけられています。しかし作者のコールドーは、1920年代に

パリにわたり、当時パリで活動していた様々な芸術家たちと交流し、自らの様式を確立したという意味では、「エコール・ド・パリ」の一員でもあります。そのことを示してくれる当時の貴重な写真があります。1929年にドイツの新聞に掲載されたものです（図2）。登場する二人の人物はコールドーと藤田嗣治。これは当時パリで大変な人気を集めていたコールドーのサーカスのパフォーマンスを開催中の一コマです。藤田はその2年ほど前に高級住宅街として知られるモンスーリ公園近くに転居していましたが、場所はその藤田邸の一室です。当時の藤田は人気絶頂の頃で、愛妻のユキとともにパリの社交界の耳目を集めるような派手なパーティーを毎夜のように繰り広げていました。恐らくコールドーのサーカスの噂を聞きつけた藤田が、新居のお披露目もかねてこの夜のパフォーマンスを企画したに違いありません。藤田は小さなドラムのスティックを握り、その前にはレコード・プレイヤーもありますから、BGMの係といったところでしょう。軽業師や踊り子などの小さな人形を操るコールドーの傍らで、独特のサービス精神を発揮して口上を述べている声が聞こえてきそうな写真です。この写真は1929年6月に撮影されたものと考えられており、3か月後には藤田は16年ぶりの日本への帰郷を果たし、さらに一月後にはウォール街の株価暴落を契機とする世界大恐慌が始まることを考えると、華やかかなりしエコール・ド・パリの最後の輝きを伝える一枚といえるでしょう。

さて《ファブニール・ドラゴンⅡ》の制作は1969年で、当館のコレクションとなったのは1988年ですから当館より前の所有者が存在すると考えられます。その疑問に答えてくれる写真があります（図3）。アメリカ、カリフォルニア州サンタ・バーバラで撮影された

一枚です。サンタ・バーバラはロサンゼルスから北西へ約100キロ、自然豊かな美しい街で、《ファブニール・ドラゴンⅡ》の所有者は作品の背後に見える邸宅の設計者バリー・アラン・パークス（1935－2012）です。パークスの名前をご存じの方は少ないかもしれませんが、アメリカを代表する建築家の一人で、ユニークなコンセプトの集合住宅などで知られ、特定の企業やエリートのためではなく、「99％の人々のための」建築を目指したという人物です。また美術品の愛好家としても知られ、コールドーの他にウォーホール、ラウシェンバーグ、ホックニー、ステラなど、現代美術のコレクターとしても有名でした。なかでもコールドーに対する関心は特別で、建築家としてまだ駆け出しの頃、制作中のコールドーの様子を撮影した映像を見て、自分が建築でやりたいことをコールドーは作品の中で実現していると直感し、以来彼の作品と現代美術に強い関心を持つようになったと自ら語っています。そして最初に収集したのがコールドーのモビール

（天井から吊り下げるタイプのもの）で、以来美術品の収集に情熱を傾けるようになります。《ファブニール・ドラゴンⅡ》を入手するのは、それからかなり経ってからのことなのですが、それは彼にとって長い旅の終点のようなもので、特別な意味を持つ作品となったと言えます。小高い丘の上に立つ広大な邸宅と敷地の中に置かれた《ファブニール・ドラゴンⅡ》の周囲を歩くたびに、暖かな気持ちと微笑みをこの作品は与えてくれた。常に動きつつ周囲と調和を保ちながら、その空間を活性化させてくれる、そんな作品なのだ、



図2 コールドーと藤田



図3 サンタ・バーバラの《ファブニール・ドラゴンⅡ》

とパークスは語っています。それほどまでに愛した作品をなぜ彼が手放したのかは分かりません。ただ恐らく彼は自分が愛した作品が、遠く海を越えて日本の美術館の所有するところとなり、その建物の正面で日々来館者を迎えていることは知っていたでしょう。そして、遠く離れ、場所が変わっても、周囲の風景と溶け合い、刺激を与えながら、人々を微笑ませ続けているだろう、そう確信していたに違いありません。その確信に応えるように、今日も《ファブニール・ドラゴンⅡ》は美術館の正面で皆さんをお迎えしています。（F）

展覧会の舞台裏

番外編

モネはどこへ行った？

今回は番外編として来年の春に開催予定のモネがらみの展覧会について、その舞台裏をご紹介します。展覧会の内容や準備状況については、次号の「現在進行形」のコラムでご紹介することになると思いますので、やや別な視点からのお話です。

名古屋市美術館ではこれまでモネ関係の展覧会を3度開催しています。1994年の「モネ展」は初期から晩年までの回顧展。2001年の「モネ展－睡蓮の世界」は、タイトルの通り、モネの代名詞ともいえる「睡蓮」をテーマにした作品のみを集めた展覧会。そして2008年の開館20周年の記念展の一つとして企画された「モネ－印象 日の出」展は、第一回印象派展に出品され、「印象派」という言葉の起源となったといわれる名作《印象 日の出》を中心に据えた展覧会でした。開館して20年の間に3回のモネ展。そして30周年を迎える来年に4回目のモネ、というわけで、いくら日本人に人気があるとはいえ、いささかやりすぎではというご批判もいただきそうですが、実は出品が重なっている作品はごく僅かで、何度でも様々な切り口で新たに紹介できるほどモネという作家は奥が深い、と担当者としては改めて感じている次第です。

さて、これほど繰り返しモネ展を開催できるのは、日本国内にモネの作品が多数存在す

ることが大きな要因としてあります。古くは松方幸次郎や大原孫三郎など、モネ存命中に画家から直接購入したコレクションをはじめ、戦後も着々と収集が進み、1980年代のバブル期には大量のモネ作品が海外から日本に流入しました。当館が最初のモネ展を開催した1994年の時点では、すでにバブル経済は終息していましたが、その頃でも多数のモネ作品が国内にあることは簡単な調査でもすぐに判明し、直ちに100点以上のリストを作成できたほどでした。今でも記憶に残っていますが、展覧会の出品交渉のためにオルセー美術館を訪問した時、日本国内には100点以上のモネがあると伝えた時、先方の学芸員から「100点以上どころか200点はあるだろう」と切り返されました。それほど大量のモネ作品があるがゆえに、2度目、3度目のモネ展を開催することもできたわけです。

ところが、今回4度目の展覧会の準備を進めるうちに、明らかに前3回とは状況が異なることに気が付きました。国内にあったはずの作品が次々と海外に流出しているという現実直面したのです。美術品は流動性の高い商品ではありますが、過去3度の展覧会の際にはこれほどの大量の流出は経験しませんでした。つまりこの10年間に、恐らくモネだけでなく膨大な美術品が海外に流出しているのでしょう。バブル崩壊後の苦難の時代を乗り切った企業やコレクターが、ついに耐え切れなくなり、あるいは近年の美術市場の異常なほどの高騰ぶりに目を奪われ、続々と手元の作品を手放していく、そんな事態が出現しているのです。日本の国力の低下を如実に物語るこの事態を、ただ指をくわえて見守るしかない現実打ちのめされます。（F）

鮮やかな絵画作品を発表しています。

名古屋市生まれ育ち、愛知県立旭丘高等学校の美術科を経て東京藝術大学の油画科を卒業した眞島は、郷土にゆかりのある作家といえるのですが、上京してから今日まで主に東京を拠点としてきたため、折々に名古屋での発表を行ってきたものの、一般にはあまり親しみのない作家であるかもしれません。愛知県美術館や名古屋市美術館が作品を所蔵したのもそれほど前のことではありません。

眞島は、1990年から作品に「地ごく楽」と題名を付けるようになります。「地ごく楽」は、

感想ノートから

25,000ページ
アドルフ・ヴェルフリ 二萬五千頁の王国
2017年3月7日(火)～4月16日(日)

アドルフ・ヴェルフリ展は、大々的な回顧展としては、公立の美術館で開催される日本で初めてのものだったので、作品を初めてご覧になった方も多かったようです。ご覧頂いた方々の新鮮なオドロキが込められた感想が多かったように思いました。「東洋の曼荼羅のような作風。近くから見ても遠くから見ても楽しめる作品。」「紙をうめつくす文字、記号、モチーフに圧倒されました。彼がどんなストーリーを思い描いていたのかはわかりませんでした。執念は確かに伝わりました。」「紙の空白をうめつくすことで、心の空白をうめようとしていたのかな。」ヴェルフリの作品の特徴は、なんといっても余白なくびっしりと埋めつくされた画面です。「どこにでも入り込むフォーグリー！前足がかわいすぎます。」「へやに飾って10年ぐらい楽しめる絵だと思いました。新しい発見をし続けられそう。」様々なモチーフが曼荼羅のような構造の中に描かれていて、よく見ると形が特徴的なモチーフが繰り返されることに気づきます。また、数字の絵に関して、「おもしろい絵があって、すうじがたくさんあるのは、おこづかいちょうみたいでたのしかったです。」というご感想もありました。わたしも作品の中の聖アドルフ王国の財産の利子計算は、架空とはいえ、天文学的な数字のお金の額に驚かされました。

また、ヴェルフリが独学で既存の美術の様式にとらわれず、独自の画面を発展させたことについて、そこに表現における自由さを感じられた方も多くいらっしゃいました。「もっと自由にやっていいんだ。」「芸術は自由であり何物にもとらわれることのないものであると改めて思い知った。今の芸術は先人たちが開いてきた様式を重んじて展開していることも多いが、こうした自由な絵は窮屈でなく、見ていて楽しい。」

また、ヴェルフリの作品に彼の生そのものを重ねてご覧になった方もいらっしゃいました。「一人の人間の人生を丁寧に追っている気持ちになり、最後には胸に迫るものがありました。」「ただただ、描かずにはいられない。描いていることで何とか生きていける。」

私自身もヴェルフリの作品の想像力や表現の自由さに魅了され、またこれほどまでに描くということがそのまま生きることと直結している作家がいたことに大変衝撃を受けたひとりでした。感想ノートで、作品から受けた感動を皆さんと共有できたことがとてもうれしく思いました。どうもありがとうございました。（hina）



会場風景

眞島の作品は、単体として展示、鑑賞されるものとして制作されているだけでなく、多数が組み合わされて展示の空間に合わせた1つの作品を作り出します。制作時期のことなる複数の作品が作品群として一回限りの1つの作品となるわけです。名古屋市美術館でもこのような展示が行われる予定です。

描くことと作ることが生きる苦しみと喜びに直結するかのような眞島の創作世界をかつてない規模と内容で紹介します。足をお運びください。（み。）

展覧会 現在進行形

眞島直子展

2018年3月3日(土)～4月15日(日)

眞島直子（まじま なおこ／1944－）は、鉛筆だけで描かれる鉛筆画と呼ばれる黒一色の絵画作品と布や糸などを用いた色彩豊かな立体作品によって評価を高めてきました。近年は、久しく制作を止めていた油彩による色

今日では作家の代名詞ともいえるものになっており、絵画と立体からなる一連の作品には、2001年の第10回バンガラデッシュ・アジア・ビエンナーレにおいてグランプリを受賞した際の出品作品など重要な作品が数多く含まれています。

この度の展覧会では、これらの代表作品を核にしつつ、新たな展開を見せる近作を含めて作家の創作世界を紹介します。また、〈地ごく楽〉シリーズにいたるまでの作家の創作の歩みを残されている作品や資料などによって紹介したいと考えています。

郷土の作家たち

安藤 幹衛(あんどう みきえ／1916－2011)

愛知県碧海郡知立町本町（現・知立市）に生まれる。1933年に愛知県立第八中学校（旧制刈谷中学校）、1935年に愛知県岡崎師範学校（現・愛知教育大学の母体の一つ）を卒業し、犬山城東村小学校に赴任。1940年、北川民次に師事。仲間とともに北斗会というグループを作り、当時東京にいた北川から指導を受ける。翌年には第28回二科展に出品し初入選を果たし、当時気鋭の薮野正雄、中野安次郎、市野長之介、西村千太郎らと名を連ねた。以後、入選を重ね1950年に会友、1954年には会員に推挙、1979年からは理事を務め、晩年は常務理事、名誉理事を歴任した。

終戦と同時に教職を辞し、制作に専念する生活に入る。1949年から1951年まで名古屋東山動物園内で開催された夏季児童美術学校に北川の助手として参加（ほかに北斗会メンバーの滝本正男、鈴木幸雄）、のちに名古屋市内に建設された北川児童美術学園での指導にも携わる。北川には絵画の技術よりも哲学的な面で学ぶところが多かったと語り、当時の世相やキュビズムに影響を受けたと思しき作例も散見される。1961－62年、1970－71年、85年、88年と四度メキシコに渡り、現地の人々との交流や直接メキシコ近代美術に触れる中で社会における芸術に対する考え方を体当た

りで理解し、自身の制作に反映させた。1980年代まではメキシコ壁画運動で特に重視されたテーマから多く題材を得ており、構図の取り方や人物の表現方法にシケイロスやタマヨからの影響を感じさせる。晩年になると人々が集う市場や祭りの賑わいを、明るく華やかな色調で描くことも増えたが、庶民の目線で社会を見つめる姿勢は終生変わらなかった。名古屋市営地下鉄名城線久屋大通駅の軌道内にある壁画《人間賛歌》（1989年）は、中部二科会に協力を得て完成させた大作で、現存する中でも最も市民に身近なものと言える。

1974年に設立された名古屋日墨協会の会長に就任、名古屋市とメキシコシティとの姉妹友好都市提携にも尽力した。1975年第28回中日文化賞、1978年アキラ・アステカ勲章（メキシコ政府が外国籍の人物に与える最高栄誉）、1992年東海テレビ文化賞、1996年名古屋市美術特賞受賞。（3）



安藤幹衛《晩餐》1950年

どっがおもしろい?!

今回は、2017年1～2月に常設展「現代の美術」のコーナーで「円」というテーマに関連して展示した、クガ・マリフ（1931－1970）の作品《拒否のサイン》（1966年）に対するコメントを紹介します。作家は本名を武田晶といい、24歳で上京するまで父親の実家のある愛知県春日井市で過ごしましたが、出生地である山口県玖珂郡麻里布町（現在の岩国市麻里布町）からとった雅号を名乗っていました。旭丘高校在学中に二科展で入選してから38歳の若さで生涯を終えるまで約20年の間、油彩だけでなく石膏、金属、合板なども用いて半立体も手掛けながら、ほぼ一貫して抽象による構成表現に取り組みました。今回の作品には全体を覆うマットな深い黒、弧を描くように膨らみを持った画面、表面のざらっとした質感、円の形状を遮るように所々に入った切れ込みから覗く空間などの要素が見られますが、謎めいたタイトルも含め、来館者はどのようなイメージで受け止めたのでしょうか。（3）

「拒否…海の底から、もがいているような、拒否したくてもできないのではないかと思います。少し怖い作品。」（ともこさん、?歳）
「どす黒い重くて暗い気持ちちが、ふつつつとわき上がって何もかも否定、拒絶している様が素てき。」（匿名、?歳）

「何が何を拒否しているのか？誰が誰を拒否しているのか？円が調和を表すものならば、その円が切られている、すなわち不完全な状態…見れば見るほどいろいろ考え、ますます分からなくなりました。」（匿名、40代）

「タイトルに“拒否”とあるけど、断られている感じではないような。むしろ切れ目から招かれているような気分になりました。ちょっと中に入ってみたいかも。」(まるこさん、?歳)

「真円のところどころが破れて向こう側の明かりに透けて見える。この作品の題名を見ないようにして、私だったらお題をどうつけるか暫し沈思黙考。“現実のほころび”、“和解の兆し”…もう答えを見てよろしいかと脇のパネルを見る。《拒否のサイン》…?! 正反対やないかいー！と叫び出したいのをこらえつつ、もう一度作品に向き合う。逆三角形に切り裂かれた鉄板のめくれ、これが関係の破たんを表現しているのか。にこやかに、しかしきっぱりと断られた…というわけか。」（chachaさん、51歳）

「これが拒否かどうか僕には分かりません。ただカンベキであるはずの円が大きくえぐられたり黒よりも深い暗い色の中に吸い込まれ

たりしています。これがどういう意味か僕には分からないけれど、僕の中にあった円がなんだかたじろいだように感じました。」（ななしさん、30歳）

「左右にある円は人の顔に見えます。2人の顔は、まん中の壁で分かれ、見ようという意志はあるけど理解ができずに深い深い暗闇に飲み込まれていきます。永遠にわかり合えないのでしょうか。」（匿名、60歳）

「きちんとした円（丸）が認識できているのに、はっきりとはつながっておらず、その円ができあがるのを拒否するかの様に傷ともとれる他の線やえぐれが大きく存在している。本当はNOと思っているのにYESといわざるをえないような、生活の中で傷ついていく現代人の“心”をあらわしている様にも感じられました。…なのですが、50年も前の作品なのですね、観る人のその時の心情によっても見え方が変わるのかな？また別の機会にも観てみたいと思います。ひときわ目を引く作品でした。」（匿名、30代）

「タイトルとは裏腹に、私がそれから受けた印象は、端的に言葉にすれば“厳格”あるいは“神聖”であった。たしかに、良い顔はしてくれていない。しかしながら、こちらを遠ざけようとする意図は感じられない。冷たいが、他方では綺麗だし、澄んでいて美しい。底部を染める闇には、むしろ寛容さが窺える。そもそも黒とは本来そういう色だ。黒は全てを受け入れる。だからこそ黒は揺るぎない。それゆえ私は“厳格”あるいは“神聖”といった単語を連想した。しかしあくまでこの絵のタイトルが《拒否のサイン》であるならば、それは一つの精神の独立性、その潔白さと、それがゆえの孤独を表現しているものだろう。」（創平さん、39歳）

「世の中を表している。色をまぜ合わせると黒くなってしまう。それは人種であれ経済であれ、思想であれ、すべてが混じり合うと円滑ではなくどこかに歪み、ひずみが出てしまう。あるいは拒否してしまう。しかし全てが白では面白いどころか狂気を感じてしまいます。それが歪んだ亀裂から垣間見える白なんだと思います。ザラザラした感触は生きている感触なんだと思ひまで与えてくれる、面白い作品。」（マミさん、たぶん35歳）

東松 照明(とうまつ しょうめい／1930－2012)
〔名古屋時代〕

写真家・東松照明は、1930（昭和5）年に名古屋市東区新出来町に生まれた。名古屋高等理工科学校（現名城大学付属高校）に在学しながら、「学徒動員」により旋盤工見習いを務め、夜にはB29による空襲とそれを探すサーチライトの光跡に美しさを感じた十五歳の夏、母方の実家があった中村区で終戦の日を迎えている。

1950（昭和25）年に写真を始め、同年入学した愛知大学では写真部に入部、翌年、自身の作品を初めて展示・発表している。《皮肉な誕生》と題された作品では、英字新聞を突き破って表れた左手が掲げる卵によって、敗戦=米軍による占領と「戦後」世代の反抗を象徴した。モチーフを組み立て、撮影された複数のネガを構成することによって得られた重層的なイメージには、シュルレアリスム（超現実主義）の手法が確認できるが、写真家はやがて、創作された隠喩の世界から脱却し、自身を取り巻く現実の社会を直視することになる。

1952（昭和27）年、新出来から守山に転居した東松は、スナップ・ショットで町の光景を撮影して行った。同年11月に開催された「第一回全日本学生写真連盟展覧会」に出品された《混血児》と題された作品は、夏の夕方、守山の町の路上で見かけた光景であった。

協力会通信

恒例、春のバスツアー
今年は神戸でブロンズィーノに出会う

名古屋市美術館協力会では、バス一台を借り切って話題の美術館や展覧会を巡るバスツアーを、毎年春と秋に実施しています。5月21日(日)に実施された2017年春のバスツアーは、「遥かなるルネサンス 天正遣欧少年使節がたどったイタリア」(神戸市立博物館)と「ベルギー奇想の系譜」(兵庫県立美術館)を巡る、神戸日帰り旅行となりました。

「遥かなるルネサンス」展は、1585年にイタリア入りした天正遣欧少年使節が、現地で目にしたであろう諸都市の文物を、少年使節が訪問した行程に沿って紹介するという企画でした。絵画と工芸品が主な展示品でしたが、伊藤マンショからフェッラー侯爵に宛てた手紙のような貴重な資料もあり、美術的関心のみならず歴史的興味からも楽しめる内容でした。1585年に少年使節がヴェネツィアを訪問した際に発注された《伊藤マンショの肖像》は、つい最近になって（2014年）その所在が確認されたことで話題になった作品です。浅黒い肌や厚めの唇、うっすらと生えた口髭など、容貌の特徴が捉えられており、実物は図版で見るとよりずっと活き活きとして見えました。同時代の日本人でここまで写実的にその容貌が伝えられている人物は殆どいないのではないのでしょうか。

ただ、何と言ってもこの展覧会の白眉は、ブロンズィーノがメディチ家の令嬢を描いた

「私の住む町守山はかつて旧連隊が駐屯し町の関門守山駅には工場通いの産業戦士が群がっていた。敗戦後は変って外国駐留軍が進駐し、兵隊を頼る女達が町に移住して来た、そして七年が経過し、町の片隅には異国の血を混えた小さな肉体を見るようになった。」

「私は、わが町の見慣れた光景を、日常の出来事をスナップした。しかし、この日常の光景は、1945年の敗戦＝米軍による占領という、日本がこれまでに経験したことのない歴史的アクシデントの表象でもある。したがって、私には、日常の光景が、日本の戦後史と重なって、非日常の光景として二重映しに見えるのであった。」

後に「戦後写真の巨人」と呼ばれることになる東松の批評眼は、1952年の守山の町でのスナップの時点で、すでに確立されていた。（J.T.）



東松照明《混血児》1952（昭和27）年
©Shomei Tomatsu—INTERFACE

《ピア・デ・メディチの肖像》でした。果たしてブロンズィーノのことを知っている日本人はどれくらいいるのでしょうか。ブロンズィーノはトスカーナ大公に仕えた宮廷画家で、イタリア絵画史では16世紀のマニエリスムを代表する画家の一人に挙げられます。ブロンズィーノの肖像画は、繊細緻密で写実的でありながら、陶器のように滑らかな肌や仮面のような固い表情をもち、どこか異様で冷たい独特の雰囲気醸し出しています。マニエリスムの時代には、パルミジャニーノやベッカフーミなど魅力的な芸術家がたくさんいるのですが、日本では実作品を見る機会が限られているため、なかなか脚光を浴びることがありません。今回、ブロンズィーノの肖像画が、しかもウッフィーツィ美術館が所蔵する名品が来日し、間近で見られる機会が与えられたのは、来場者や神戸市民にとって実に幸運なことと言ってよいでしょう。

神戸市立博物館は1時間半、兵庫県立美術館は特別展と常設展の両方を2時間15分かけて見て回りましたが、美術愛好家の皆さんと話を弾ませながら見ていくと時間はあっという間に過ぎていきました。「名古屋市美術館協力会ブログ」にも詳細がレポートされていますので、バスツアーや協力会の日ごろの活動に関心をお持ちの方はぜひそちらも覗いてみてください。（nori）



イベントガイド

■休館のお知らせ

名古屋市美術館は、改修工事のため**10月6日(金)まで休館**します。長期間にわたりご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

なお休館期間中は、会場を他の施設に移し、当館の展示の魅力をより多くの皆さまにお伝えする「出張講演会」を開催します。申込不要、入場料無料です。ぜひお越しください。

■出張講演会

●「歴史と文化の街ランスの魅力」

10月7日(土)から開催する特別展「ランス美術館展」に先立ち、フランス歴代国王が戴冠式を行った由緒ある街でシャンパンの産地としても知られるランス市の魅力を、歴史と美術の両面からわかりやすく解説します。

①日時： 8月22日(火) 14：00～15：30

会場：名古屋科学館サイエンスホール
定員：先着300名
講師：深谷克典（名古屋美術館副館長）
②日時： 8月30日(水) 14：00～15：30
会場：名古屋博物館講堂
定員：先着220名
講師：保崎裕徳(名古屋美術館学芸係長)
●「『いま』を読み解くーアートの世界の愛しき女性たち」
特別展と同じく10月7日(土)から、常設展「名品コレクション展Ⅱ」を開催します。その出品作や当館の所蔵作品について、「女性」をテーマにわかりやすく解説します。
日時：10月17日(火) 14：00～15：30
会場：イーブルなごや（名古屋市男女平等参画推進センター・女性会館）ホール
定員：先着350名
講師：井口智子(名古屋美術館学芸課長)

詳しくは、美術館ウェブサイト<http://www.art-museum.city.nagoya.jp>をご覧ください。（モサ）

展評

2017年6月6日(火)～24日(土)
ガリレア フィナルテ

「空にふれる」青木聖吾&文谷有佳里展

絵画を手がける作家の二人展。青木聖吾は、愛知県立芸術大学を卒業後、関東に拠点を置いて活動している作家だ。若い頃高松次郎のアシスタントをしていたことがあるとのこと、机上に積み置かれていた影を描いたポートレートの作品に、高松次郎の影の作品に通じる雰囲気が感じられた。会場には「蜃気楼—mirrage」というシリーズの作品が展示されていて、これも影や幻影といったイメージを表していたのだろうか。彩られた粒を描き、その粒で人の形が形成されている作品だった。わたしには、描かれた粒が実体を持っているように見えて、物体としての人間が最小限の分子から成り立ち、さらにその分子は原子の集まりであり、それは運動しているのだということを想起した。まるで、細かな原子や分子の均衡が崩れて、物質が解体し、風に乗って流されていくように、浮遊する軽い粒からなる人の形がふうっと吹かれて散らばっていくようでもあった。

一方、文谷有佳里は愛知県立芸術大学で作

曲を勉強したが、線を基調とした絵画を手がけている。当館の「ポジション2012」展にも出品して頂いたことがある。文谷との2人展になったのは、青木の希望であったとのこと。今回出品されていた、文谷の線で形作られる画面の中で、これまでよく見られたような直線が基調のもの以外に、力強くはあるが柔らかい線で描いている作品の存在が気になった。直線と短い曲線が集約していく中に、どこか物質的な実体感を孕んだ像が立ち上がってくる。まるで平原の中にたたずむ大きな木のようにもあり、山や森の存在感が感じられる、風景そのものだった。

粒子が拡散するイメージと、線が集約され



会場風景

ヴェールがかかったような表現であったり、デンマーク独特の光であったりするが、このように、印象派に続きながらもその土地の特色が表れるのは、スケーエン派だけではなく、ヨーロッパの様々な場所の近代に言えることのように思う。美術史の流れの本流にパリの印象派があるとして、他の土地ではまたそれぞれに異なった味わい深い表現がなされていたということだろう。

展覧会の規模としては大きくはないのだが、今まで馴染みのなかったスケーエン派の作品に接し、印象派とはまた異なった彼らの作品の良さを知ることが出来たことは収穫であった。そして、我々が知っている従来の美術の世界を少し広げてくれるような展示であったと思う。(AN)



アンナ・アンカー
《ダンスパーティーのための青いドレスを縫う3人の老女》
1920年
スケーエン美術館蔵 ©The Art Museums of Skagen

ます。

馬場氏は1961年に荒川氏の作品を観て衝撃を受け、二人は1979年に実際に出会い、交流が始まりました。それから2010年に荒川氏が急逝するまで、馬場氏は約50年にわたり荒川作品に心を寄せ、観続けてきました。その時々寄せられた文章には、作品を自分の目で見て感じ、昔の体験を振り返りながらも新鮮な目を忘れない観る力、そして好奇心があふれており、芸術を楽しむ心をも教えられます。

2008年に岐阜で開催されたシンポジウムに参加した際に、会場の議論に苛立つ荒川氏の言動を冷静に受け止め、「翻訳者」となる馬場氏を目の当たりにし、二人の間にある強いつながりを感じたことがありました。本書には荒川氏から馬場氏への私信が含まれていますが、そこには制作への情熱や周囲への期待、馬場氏の息災を気遣う気持ちなど、荒川氏の「生の声」が綴られています。それぞれの領域である美術と医学を超えて、「身体」のあり方を追求していく者として育んだ二人の共感と信頼感が伝わってきました。

本書のなかで「作品を体験した人が、以前の自分から少しでも変化したと実感してくれればそれでいいのだろう。」(P.55) という一節があります。自分の身体や意識の変化を発見しに、新鮮な気持ちで荒川作品に出会いに行ってみようと思います。(I.)

る中で実体的な風景として立ち上がってくるイメージ、それぞれの作品の持つ抽象的な要素が対照的で、並べて展示されることで、作品が互いに影響し合って、それぞれの個性が

展評

2017年7月8日(土)～30日(日)
安藤七宝店 (名古屋市)

長田沙央梨展 humming

長田は愛知県立芸術大学（彫刻専攻）の出身。在学中は自転車やテレビなどの廃品の表面を、松かさ（松ぼっくり）の鱗片で部分的に覆う作品を制作していた。工業製品に寄生し、増殖しているような鱗片のかたまりは、動物でも植物でもない、菌類という第三の生物群の生体や形状を彷彿とさせるものだった。バイオモルフィック（生命形態的）でありながら、例えばジャン・アルプの作品のような内部からの膨張で生命力を感じさせる彫刻とは少々異なった趣もあり、人工物と自然物、腐朽と繁殖の対比が魅力的な作品であった。その後、愛知県芸を卒業した長田は東京藝術大学大学院に進学、松かさを使った制作をやめて、人工物や自然物から抽象した面白味のあるかたちを、陶土や木材でかたどる仕事を続けている。

この個展では「ふしぎなしょくぶつ」と題されたレリーフが5点、鳥のオブジェが2点展示された。いずれも彩色を施した陶の作品で、親しみやすく観る者の想像をかきたてるような稚拙美が意図されている。植物のレリーフは、いびつな楕円に切り抜いた合板を「地」として、その表面に陶製の植物のパーツを貼りつけたもの。題名のとおり曖昧で奇妙なかたちをしており、葉は花に、枝は茎にも見て取ることができる。レリーフという平べったい形状や、合板を支える台座として用

浮かび上がるという効果をもたらしていた。色の有無という対照もよかった。美術館での展示でも個々の作品の個性を引き立たせる為に参考にさせて頂きたいと思った。(hina)

いられた自然石との組み合わせから、古代生物の化石を連想することも可能だろう。

展示構成で目立ったのは建材の使用である。前述のようにレリーの「地」には合板が用いられているが、合板は鳥のオブジェを載せる舞台としても使われている。また、角材を格子状に組み上げた仮設壁が会場を半分に区切っており、植物のレリーのうち3点はこの仮設壁に取り付けられている。仮構の空間であることを印象づけ、見る者をイメージの世界へと誘う工夫だろう。

レリーフも壁も、作品を表から見るように促す仕掛けである。大袈裟に言えば、全方位から見られる彫刻の宿命から抜け出して、長田の作品（あるいは展示空間）は絵画に接近している。陶という手法の選択や、骨格や芯を感じさせない緩い造形など、彫刻の既成概念から離反して中間領域に向かう要素は他にも指摘することができ、興味深い。(nori)



会場風景

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

ローザス《ファーズ—Fase》

2017年5月10日(水) 19：00～
名古屋市芸術創造センター

恥を承知で率直に言いますが…これほど必死に眠気と闘いながら観たダンス公演は人生初でした。誤解のないように補足しますが、決して退屈な内容だったわけではありません。ローザスは、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルが率いるベルギーを代表するダンスカンパニー。今回の演目は現代音楽家のステイーヴ・ライヒによる4つの楽曲「ピアノ・フェイス」(1967)、「カム・アウト」(1966)、「ヴァイオリン・フェイス」(1967)、「クラッピング・ミュージック」(1972)をもとに構成されているダンス作品です。

楽器や手拍子による音（「カム・アウト」では録音された声）が無限にループする中で、ユニゾンだった音がわずかにずれたことで狂い始めるときの何とも言えない違和感、一巡して再び重なり合う一瞬の妙を、女性ダンサー2人がシンプルな白幕の舞台上で可視化していく姿は圧巻でした。同じ動きを寸分たがわず繰り返す身体能力(体幹の強さ)、衣装の裾の広がりまで計算し尽くした高度な振付に加え、ダンサーの影を本来見えないはずの音に見立てる演出にも驚きです。その影があまりにも美しく動くので、舞台の上のダンサーの数を何度も確認するほどでしたが…眠くなってしまった理由もまた楽曲の性質に

因るようです。

4つの楽曲とも短いフレーズをひたすら繰り返す音の連続で、集中して聴けば聴くほど、時間は確実に流れているはずなのに進んでいないような、ずっと同じところに留まっている感覚に襲われ、脳が一時的に催眠療法に似たリラックス状態になってしまったと思われる。アナログ時計の秒針や車のウィンカーの音に長く耳を澄ましている状況を思い出し

てもらえばよいかもしれません。
ポピュラー音楽に慣れていると、Aメロ→Bメロ→サビのような展開や、歌詞から想像される何らかの物語を追う癖がついてしまいがちです。そのような周辺の要素をそぎ落とし、音の構成や小さな変化に細かく意識を向けて表現されたダンスは、音楽とは何か、音とどう向き合うか、を言葉や理屈ではなく見える形で示し、音楽に疎い人間にも分かりやすく問題意識を共有させるもので、バレエやストリート系のダンスとはまた違う面白さと興奮がありました。(3)



©Anne Van Aerschot

BOOK

『意味の彼方へ——荒川修作に寄り添って』

(馬場駿吉著 書肆山田 2016年)



名古屋出身で、長くニューヨークにて活動していた荒川修作氏。名古屋市美術館にも作品が収蔵されており、なじみ深い方も多くいらっしゃると思います。本書は、名古屋出身で、美術評論家・俳人の馬場駿吉氏が、荒川氏の作品、活動に寄せた文章が収められてい